

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

イベロアメリカ研究センターニューズレター vol.3

# IMÁGENES DE IBEROAMÉRICA

EL CENTRO DE ESTUDIOS IBEROAMERICANOS



Santo Domingo de Silos (Castilla)

Juan Antonio Olañeta 氏提供

## 目次

### シンポジウム

◆スペイン演劇のいま —新しいきざしとところみ— (2013年11月23日)	
田尻 陽一 (関西外国語大学教授)	
「シンポジウム スペイン演劇のいま —新しいきざしとところみ— を開催して」 .....	3
岡本 淳子 (大阪大学助教)	
「21世紀のスペイン演劇 —2人の女性劇作家の視点から—」 .....	5
小阪 知弘 (関西外国語大学非常勤講師)	
『あの無限の風』(2002)におけるギリシア神話と現代の止揚」 .....	7
吉川 恵美子 (上智大学教授)	
『死よりも意外な出来事』を訳して」 .....	8

### スペイン語教授法研究会例会

◆第5回スペイン語教授法研究会 (2013年6月15日)	
泉水 浩隆 (南山大学准教授)	
「スペイン語は日本語話者にとって発音のやさしい言語か? —音声教育におけるヒント—」 .....	10
◆第6回スペイン語教授法研究会 (2013年11月30日)	
小池 和良 (拓殖大学教授)	
「日本語話者がスペイン語で書くために —構文演習とコロケーション—」 .....	11
◆2013年度スペイン語教授法研究会の総括	
和佐 敦子 (関西外国語大学教授) .....	12

## 公開講座・文化イベント

### ◆関西外国語大学公開講座（2013年6月4日）

比嘉 セツ（スペイン語映画配給 Action Inc.代表 翻訳・通訳者）

「スペイン語映画に観るラテンな生き方」 ..... 13

### ◆関西外国語大学公開講座（2013年12月3日）

Juan Antonio Olañeta Molina（「ロマネスク美術友の会」会長）

「スペインのロマネスク美術 —魅惑と幻惑のはじまり—」

Resumen conferencia: *El Románico en España.*

*Iniciación a un arte fascinante* ..... 16

田尻 陽一（関西外国語大学教授）

「講演会『スペインのロマネスク美術 —魅惑と幻惑のはじまり—』の

通訳をして」 ..... 23

## スペイン語学科主催 教授法ワークショップ（イベロアメリカ研究センター後援）

### ◆第1回（2013年10月26日）

Concha Moreno García（東京外国語大学特任教授）

“El enfoque comunicativo moderado y su utilidad para la clase

Un ejemplo: *Nuevo Avance.*” ..... 24

要約「文法を重視するコミュニカティブ・アプローチと授業への有用性

—*Nuevo Avance* を例にして—」 ..... 27

### ◆第2回（2013年12月14日）

Teresa Bordón（Universidad Autónoma de Madrid）

“La evaluación de EL/2 en el marco de la instrucción formal” ..... 28

要約「学校教育の枠組みにおける第2言語としてのスペイン語(EL/2)の

評価」 ..... 31

## シンポジウム

スペイン演劇のいま —新しいきざしとところみ— を開催して

田尻 陽一



インターナショナル・コミュニケーション・センター ICC ホールにて

1975年11月20日、フランシスコ・フランコが亡くなった。享年83歳だった。

スペイン内戦(1936～39)に勝利し、国家元首(1936～75、法的には39年4月1日)、首相(1938～75)に就き、40年間にわたって独裁政治を敷いた。しかし、フランコが亡くなったからといってスペインの政治体制が急変したわけではない。フランコはフランコとして自分の体制を維持しようとしていたし、ヨーロッパ並みの民主国家を目指す動きもあった。

今年の夏に刊行予定の『現代スペイン演劇選集』で、翻訳を担当して下さった先生方に集まっていただき、ご自分の担当した作品から現代スペイン演劇の何が見えてきたのか、語っていただくという趣旨でシンポジウムを開催した。残念なことに、古屋先生、吉川先生は本務校の都合で、矢野さんはスペインにいるため、参加していただけなかったが、岡本先生、小阪先生、それに田尻の3人で2013年11月23日、シンポジウムを開催することができた。吉川先生からは作者と作品に対するコメントをいただいたので、田尻が代読した。

さて、編集・監修の責任者としてこの選集に収める作品は何をもって「現代」というのか定義づけなければいけない。具体的には何年からの作品を選べばよいのかという問題だ。現憲法が制定された1978年から、もしくは社会労働党が政権を取った1982年からと

も考えることができるが、スペインが民主主義国家としてヨーロッパの一員に認められた EC 加入の 1985 年からと考えるのが妥当であろうと判断した。

しかし選集に収録する作品を 1985 年以降のものに限定してよいものか、迷った。なぜなら、1975 年から 85 年までの 10 年間、いわば民主化への移行期に作られた作品も無視できないからだ。歴史もそうだが、演劇活動が 1985 年からガラッと変化したとは考えられない。ものごとには常に予兆というものがある。ならば、この選集の第一番目には新しい演劇を予兆する作品から始めるべきだろうと考えた。

確かにフランコ体制下では、スペイン内戦などまるでなかったかのように、ブルジョアの家庭内で起こった親子関係のゴタゴタが最後にはうまく収まり家庭円満（＝国家安泰）というハッピーエンドで終わる作品しかなかった。ハビエル・ポンセラやミゲール・ミウラの作品がそうだ。検閲制度があったので、社会問題をあぶりだすリアリズム演劇は上演禁止処分を受けた。体制批判だと判断されたのだ。それでも反体制作家として活躍したブエロ・バリェホやアルフォンソ・サストレは検閲制度をかいくぐりながら演劇活動を行った。フェルナンド・アラバールのように、フランスに活動の場を移した作家もいた。

検閲制度が廃止されたのは 1977 年である。しかし、フランコが 1975 年に亡くなると、検閲制度を無視した二つの現象が見られた。一つは検閲によって上演禁止処分を受けた戯曲の上演と、内戦後海外に亡命した作家の作品の上演だ。バリェホの『バルミー博士の二つの物語』とラファエル・アルベルティーの『アデフィシオ』をあげることができる。どちらも 1976 年に上演され、筆者も若者たちの熱気溢れる劇場で二つの作品の上演に立ちあった。「この作品が上演されるのか」という個人的な感慨以上に、改革を求める観客の真剣な眼差しが忘れられない。

検閲制度が廃止され、表現の自由が保障されると、戦後の肉体的な飢えと知的な飢えとをじっと耐え忍んでいたかのように、直接スペイン内戦をテーマにした戯曲が書かれた。戦前生まれのフェルナンド・フェルナン・ゴメスは内戦下におけるマドリード市民の耐乏生活を『自転車は夏のために』（1976）で描いている。この作品から選集を始めることにした。

フランコ体制下、検閲に苦しめられたバリェホは表現の自由が許されると、逆にいい戯曲は書けなかった。反対に、いまでも ETA の支持者であるサストレは、アメリカ人エドガー・アラン・ポーを主人公にした『どこにいるのだ、ウラルメ、どこだ』（1990）という詩的な作品を書いている。どこに反体制的な主張があるのか一瞬疑ったが、彼は人間としての尊厳を踏みにじる社会という体制そのものに抗議しているのだ。

わずか客席数 20 名という劇場で初演されたアラバールの『愛の手紙』は切符を手に入れることが不可能だった。戯曲が刊行されて読んでみて、なぜアラバールが『アッシリア皇帝と建築家』においてあれほどまでに母親を憎悪するのか理解できた。フランコ支持者のアラバールの母は共和派の父をフランコ側に売ったのだ。

戦後に演劇革新を求めて活動を開始した劇作家は内戦を体験していない。それゆえ、内戦を客観的、冷静にとらえることができる。ホセ・サンチス・シニステラは『歌姫カルメラ』(1986)において、民間人に対する国民戦線側の非人道的な虐殺を取り上げている。また、現代社会がかかえる諸問題、つまり麻薬、セックス、汚職、移民、鬱などを取り上げる作家も出てきた。ホセ・ルイス・アロンソ・デ・サントスは『モロッコの甘く危険な香り』(1985)において、若者社会の麻薬、セックス、ヒッピー的な生き方を扱っている。

こういった第一世代の劇作家に続く第二世代として、次の6人をあげておこう。いま一番脂の乗り切った劇作家たちだ。まずフアン・マヨルガ。彼は自分が発した言葉が逆に自分を呪縛するという現代的存在論をテーマに戯曲を書いている。なかでも『スターリンへの愛の手紙』(2000)は傑出している。ホセ・ラモン・フェルナンデスは、1925年から36年にかけて、スペインの明るい未来を信じてマドリードの学生館で研究に勤しんでいた科学者たちが、内戦により亡命せざるをえなかった運命を、『研究室はミツバチの巣箱』(2010)で見事に演劇空間として構築している。エルビラ・リンドの『死よりも意外な出来事』(2002)は吉川先生に、リュイサ・クニリエの『あの無限の風』(2002)は小阪先生に、パロマ・ペドレロの『キス、キス、キス』(2005)とライラ・リポイの『聖ペルペトゥア』(2010)については岡本先生に任せよう。

第三世代という若い人から二人を選んだ。アルフレッド・サンソルとマヌエル・カルサダだ。二人とも42歳。筆者はそれぞれ二人の『月の世界で』(2011)と『辞書』(2012)を実際に舞台で見て、この選集に入れることを決めた。翻訳を開始してから二人ともスペイン最高の演劇賞を受賞している。



田尻陽一氏

『現代スペイン演劇選集』には以上13人を取り上げたが、まだまだ注目している劇作家たちがいる。アンヘリカ・リデイ、エルネスト・カバリェロ、アントニオ・オネッティ…、挙げていけばきりが無い。『続現代スペイン演劇選集』が編集できればいいのだが。

## 21世紀のスペイン演劇 — 2人の女性劇作家の視点から —

岡本 淳子

今回のシンポジウムでは、『現代スペイン演劇選集』のために私が訳出を担当した2作品および、その著者パロマ・ペドレロとライラ・リポイについて発表した。

マドリード生まれのパロマ・ペドレロ(1957～)は、女優として演劇界に入った後、劇

作家および演出家としても活躍するようになる。劇作家としてのデビュー作は、一組の夫婦の軽快なやりとりが秀逸の『ラウレンという名の女』(1985)である。カーニバルの日、夫は女装、妻は男装の準備をしながら、互いに夫婦生活における不満や問題を吐きだしていく。最終的に、夫が性同一障害に悩んでいることが明らかになる。性同一障害が病として認知されていない当時、この作品は大きな物議を醸しだした。その後、彼女は自叙伝的な一人芝居『あたし、天国には行きたくないの』(2002)のなかで、処女作上演後の世間のヒステリックな反応と彼女に対するバッシングを暴露している。

今回訳出した『キス、キス、キス』は2005年発表の作品である。本作品に収められた11の短編に共通するテーマは、タイトルが明示するとおり、キスである。ペドロは11作品中9作を女性主人公の独白形式にしている。本作品にも自叙伝的要素が多分にあるものの、年齢や職業、タイプの異なる女性を主人公とする各短編では、様々な状況でのキス、そしてキスに伴う性的興奮や快楽が赤裸々に描かれる。独白の形を取ることで、女性の性が、行為として示されるのではなく、心の声として観客に届く。

もう一人の作家ライラ・リポイ(1964~)もマドリッドに生まれ、女優、劇作家、演出家、劇団の主宰者として活躍している。今回訳出した『聖ペルペトゥア』(2010)は、カトリック信仰において殉教者として崇められる聖女ペルペトゥアが主人公である。盲目で高齢のためベッドから起き上がることのできない聖女を、聖人である弟2人が世話する。過去・現在・未来の出来事を透視できる聖女のもとには、毎日数多くの参拝者や相談者が訪れる。しかし、ソイロと名乗る男の訪問が聖なる姉弟の生活を一変させる。内戦時に奪われた自転車の返却を執拗に迫るソイロを前に、トランス状態になったペルペトゥアは、内戦時の悲惨な連行と銃殺の様子などを語り出す。明らかになるのは、ペルペトゥアがかつて利己的な恋愛の成就のため、ある女性をフランコ側に密告し、結果としてソイロの叔父を死に追いやったという事実である。最後に、聖女は弟の手によって銃殺される。

スペイン内戦終結後74年、独裁制終焉後38年経った今、内戦を経験していない4代のリポイが、比喻を用いてはいるが、これほどまでに生々しく内戦を描いたことに驚きを禁じ得ない。ペドロの場合は、登場人物の語りにフランコ時代への批判が垣間見られるし、性の問題を舞台に上げること自体が、フランコ時代に重視されたカトリックの教えへの反発だと言えるだろう。今回担当した2人の作家、2つの作品から見えてくるのは、21世紀の今もなお、内戦や独裁制の傷はまだ癒えていないということである。



岡本淳子氏

## 『あの無限の風』(2002)におけるギリシア神話と現代の止揚

小阪 知弘

シンポジウム「スペイン演劇の今 ―新しいきざしとところみー」において、私は田尻陽一教授、岡本淳子先生と共に、現代演劇に関する口頭発表をおこなった。発表の際、パワーポイントを用いてスクリーンに舞台写真を投影し、スペイン語の音楽も使用した。私が同シンポジウムで取り上げたのは、スペイン・バルセロナ出身の女流劇作家、リュイサ・クニリエ（1961～）が執筆した *Aquel aire infinito* 『あの無限の風』（2002）という戯曲である。私は田尻陽一教授の要請を受けて、同戯曲を翻訳した。この作品は『現代スペイン演劇選集』（2013）に収められることになっている。『あの無限の風』は2010年度スペイン文化省の国民劇文学賞を受賞したクニリエの代表作である。

作品の劇世界はシンプルに構造化されている。名前をもたぬ2人の登場人物、〈彼〉と呼ばれる男と〈彼女〉と呼ばれる女が観客を前にして、とりとめもない日々の出来事を交互に語らうところから舞台は始まる。このように、作品は簡素な対話劇として形象化されているが、クニリエは自らの物語に普遍性を与えるため、物語構造の枠組みにギリシア神話を導入した。外国人移民の測量士である〈彼〉ユリシーズは、4人のギリシア悲劇の女性たちと出会う。最初は、エレクトラ。〈彼女〉は母親の葬儀から戻ってきたところである。2人目は、フェードル。フェードルは〈彼〉に恋をする。3人目は息子2人を殺した罪で刑務所に入っていたメディアで、〈彼女〉は17年ぶりに刑期を終えて刑務所から出てきたところである。最後はアンティゴネーである。アンティゴネーの兄は殺されたテロリストで、〈彼女〉自身も警察にマークされている。幕切れ場面で、〈彼女〉は警察に銃で連射されて殺されてしまうのである。



小阪知弘氏

『あの無限の風』はギリシア神話を下敷きにしなが、現代の諸問題を多く取り上げている。大都会の孤独、不条理の感覚、男女間におけるコミュニケーションの不在、テロリズム、空虚さ、愛、死などである。そのなかでも傑出しているのは、存在の不安定感である。〈彼女〉は冒頭場面で自らが抱く存在の不安定感を以下のように告白している。「耐えがたい重みに、耐えるという耐えがたい重みに、耐えるという耐えがたい重みに、耐えるという耐えがたい重み…」この詩情あふれる発話には、存在の耐えられない軽さと重さ、そして不安定感が表出している。フランスの女流作家マルグリット・ユルスナールが述べているように、ギリシア劇を古代から現代へ移すのは魅力的だが、同時に危険も伴う。だが、クニリエはギリシア神話のシチュエーションを古代から現代に移し変えて、現代における観念劇の要素と詩劇の要素を見事に止揚させている。ここまで述べてきたことを踏ま



えれば、本発表を以下のように結論づけることができる。すなわち、『あの無限の風』は、クニリエの古典文学に対する尊敬と挑戦の具体的な発露なのである。この劇作品によって、彼女はギリシア神話を現代化することに成功したに止まらず、新しく、すばらしい 21 世紀文学を創造したということができるのである。

## 『死よりも意外な出来事』を訳して

吉川 恵美子

実に巧みに構成されたウェルメイド・プレイに出会えました。通常、「ウェルメイド・プレイ」というと中身の薄い娯楽劇というニュアンスを含むのかもしれませんが、一気に観客を舞台に引き込み、固唾を飲んで劇の展開に立ちあわせ、最後まで目を釘付けにしまおうという点でこの作品は「ウェルメイド」そのものだと感じます。それでいて、最後に観客の心に上質の澱が残されるのですから、多くの読者・観客にこの作品に出会ってほしいと願います。

物語には老作家を巡るふたりの女性が登場します。老作家の妻であるインテリの女性と若い愛人テレです。老作家が急死したことからこのふたりは向き合うことになり、それぞれの人生と人生観が一気に見えてきます。老作家をステップアップに人生を切り開こうとする点でふたりは共通していて、エルビラ・リンドもこれを否定してはいませんし、女性が本性的に持つ宿運の暗い部分に寄り添う女性作家の思いのようなものも描き込まれています。ただ、このふたりの女性の人生への向き合い方にははっきりとした違いを設定しています。インテリ妻は老作家を踏み台にしてきた自分に罪悪感があり、愛人には罪悪感がありません。なぜ愛人には罪悪感がないのかはネタバレになるのでここに述べるのは控えます。

劇作品は様々な構成要素から成り立っていますが、『死よりも意外な出来事』の最大の魅力は台詞の巧みさであると思います。例えば適切であるかは分かりませんが、詐欺師が人の心を絡め取っていくとき、あるシチュエーションにおいて有利に立つときの会話の構図とはこういうものなのかと何度も感じ入りました。上に述べた「罪悪感」の有無が台詞に巧みに反映されて行きます。迷いのある人と、迷いのない人の言葉の使い方は根本的に違うのだ、ということはこの作品で知りました。訳出の合間には、巷の詐欺師がまんまと仕事をやり遂げるのは、彼らに迷いがいないからなのだと妙な納得もしました。

言葉の駆け引きが大きな要素を占めるこの作品の訳出は容易ではありませんでした。「そうするわ」といいつつ実はそうするつもりなど毛頭ないと思われる場面でも、台詞自体は「そうするわ」としか訳しようがありません。戯曲の読者は当然読み取ってくれるだろうとは思いますが、こんなところで、文字の作業に留まらざるを得ない劇作品の翻訳の限界、

文字媒体である「戯曲」の限界を感じました。また、愛人テレが用いる言葉は、老作家に対するときと、インテリ妻に対するときとは異なります。老作家に対しては方言交じりで話します。信頼の証なのでしょう。さらに、彼女は自分のへたくそな作文を読んで聞かせるのですが、スペイン語でつづられたこの作文がどの程度稚拙なのか、ネイティブでない者には頭の痛い問題でした。こうした生の言語のもつ特性をどう日本語に反映させるかの判断が難しくはありましたが、翻訳者には頭の中で演出しながら作業を進める権限が与えられているのだと考え、大いに楽しませてもらったというのも事実です。

“死よりも意外な出来事”が次々と起ってくる筋の展開にはそれだけでも興味の尽きないものですが、私にとってこの作品のなかでいちばん印象的な場面は、小さなアパートで老作家が愛人テレとの時間を過ごしているときに雨が降り始めるシーンです。アパートの中庭から臭いが立ち上り、雨が降り始めたのだと分かるのです。ゆっくりと流れる時間の中でふたりの人間が心を開きあい、生きるということの深淵に触れるときに、静かに降り始める雨。めまぐるしく展開していく「出来事」のなかにこうした装置を滑り込ませ、緩急を操る技量もリンドの優れた資質の表れでしょう。

ある時はインテリ妻の立場に立ち、ある時は愛人テレの思いを追いながら、この作品を訳してきました。よく俳優は幾つもの人生を疑似体験できるといいますが、翻訳者もそうなのだと思います。訳し終えた今、テレのように迷いなくのし上がっていく人生を突き進めれば楽かもしれないと思うのですが、私には無理でしょう。なぜか。人の人生観はさまざまな来歴によるものであり、テレがそれまでの人生で払った重い代償に匹敵するものが私の人生にはなかったからです。『死よりも意外な出来事』の舞台上で展開する物語は「ウェルメイド」ですが、作品の向こうには、「ウェルメイド」では決してありなりえない人生を感じ取らせてくれる素晴らしい作品でした。この作品に出会えた幸運と、翻訳を託してくださった田尻先生に心から感謝いたします。(2013-11-23)



## スペイン語教授法研究会例会

### 第5回スペイン語教授法研究会

#### スペイン語は日本語話者にとって発音のやさしい言語か？ —音声教育におけるヒント—

泉水 浩隆

スペイン語は日本人学習者にとって「発音がやさしい」言語であるというのはよく言われることである。母音の数や子音の種類、つづりの読み方などから見ると、他の外国語と比べて確かに近づきやすく感じられることばかりであり、また、これがスペイン語を学び始めるモチベーションの1つとなっているとも言えるだろう。

しかし、このような側面があるからといってスペイン語の音声面の学習は本当に「やさしい」のだろうか。似ているところがあるからこそ、逆に「むずかしい」ということもあるのではないだろうか。



泉水浩隆氏

本発表では、まず日本語・スペイン語双方の母音・子音の図を比較しながら、どのあたりに困難が生じるかを概観し、続いてスペイン語の音声教育の現状がどうなっているか、スペインおよび日本で出版されている教材などにおける音声教育の扱いについて紹介した。

次に、Fernández Lázaro, *et al.* (2013) で指摘されている問題点を念頭に置き、日本人スペイン語学習者が困難を感じると思われる音声面のポイントについて検討した。その具体的な例として、スペイン語を母語とする学習者による日本語発話および日本人学習者によるスペイン語発話の録音をいくつか聞き、両者を対比させながら、特に韻律的側面に注目して、そこに見られる問題点を指摘した。

さらに、音声知覚の面に関し、平叙文、上昇調疑問文、下降調疑問文、句末の4つのイントネーションパターンについて、スペイン語母語話者と日本人スペイン語話者の知覚を比較した Sensui (2013) を基に、その違いを論じた。具体的には、平叙文・上昇調疑問文は双方のグループとも正しく知覚される傾向が強いのにに対し、下降調疑問文と句末のパターンについてはその割合が下がり、特に日本人スペイン語学習者の方がその傾向を強く示すこと、日本人スペイン語学習者はイントネーションパターンの知覚を主に文末のピッチの動きによって行っていると思われるのに対し、スペイン語母語話者はそれ以外の情報源も利用していると考えられることを述べた。また、泉水他 (2008) の HLH\*音調<sup>※</sup>に関する

る研究にも触れ、日本人スペイン語学習者の文末のパターンによる文種類の知覚はスペイン語母語話者と類似していること、その一方で、HLH\* 音調の H 部分がスペイン語母語話者に対して持つキューを、日本人スペイン語学習者は知覚していないこと、したがって、日本人スペイン語学習者は、文の種類を主に文末の動きに頼っており、それ以外の部分からの情報はあまり利用していないのではないかとすることも指摘した。

最後に、音声面では一見すると共通点や類似点が多いように思われる日本語とスペイン語ではあるが、日本人スペイン語学習者の発話や知覚を観察すると、そうした共通点・類似点があるからといって必ずしも「やさしい」わけではなく、相違点に十分留意した指導が必要ではないだろうかということ述べて結びとした。

※ "high low high star"と読む。ある語の強勢音節が高い音調で発音され（これを H\*で示す）、その直前の無強勢音節が低く(L)、さらにその直前の無強勢音節が高く(H)発音されるという現象を指す。(編集者注)

## 第6回スペイン語教授法研究会

### 日本語話者がスペイン語で書くために ―構文演習とコロケーション―

小池 和良

母語と外国語の学習過程を比較すると、目的や動機、文法規則や語彙体系の習得方法にいたるまでに大きな相違がみられる。母語は生後すぐに音から学び始めるのに対して、外国語は母語が定着した後で、ある動機や興味があって文字から学び始める。つまり母語の習得は無意識であり、外国語はあくまで意識的である。本発表ではこの外国語学習の特質を考慮に入れ、日本語話者がスペイン語を書く際に、どのような学習方法が有効であるかを提案した。



小池和良氏

スペイン語を聞いて、読んである程度理解できるようになった。しかしだからと言って決してスペイン語を自由に書けるようにはならない。スペイン語で文章を書くためには、スペイン語の文を正確に読むことを繰り返し、自分の中に語彙のデータベースを構築することが何より必要である。そのデータベースの中核をなすものがコロケーションである。そして、そのアウトプット、つまり組み立てた語彙の発信を可能とするのが構文の知識である。

スペイン語には「動詞+名詞」「名詞+形容詞」「動詞+副詞」などのコロケーションがある。この中の「動詞+名詞」のコロケーションを数多く身につけることが、スペイン語

の作文には必須である。そのための方法として、コロケーションを中心とした講読演習（スペイン語を読む際にコロケーションを見つける練習）、多義動詞から特殊動詞への置換練習、動詞の原義と転義に焦点をあてた練習や多義動詞の構文別意味リストの作成を提案した。

構文習得のための演習として次に挙げる4つの方法を紹介した：

a) 複文の単文化

b) 「主語+動詞+直接補語」構文理解のための演習

能動文を受動文・estar+過去分詞構文・再帰受動文にする演習

c) 動詞句の名詞句化（名詞化）

自動詞文・再帰動詞文・他動詞文を名詞句化する演習

名詞句を自動詞文・再帰動詞文・他動詞文に変換する演習

d) 関係詞を理解するための演習

文から関係詞を使って特定の名詞を取り出す演習

関係節の先行詞を元の文に戻す演習

まとめとして、文法規則の運用能力の訓練の他に、スペイン語の語形成・類義関係・語のネットワークなどの語彙規則の運用能力の訓練の必要性を強調した。

## 2013年度スペイン語教授法研究会の総括

和佐 敦子

今年度は春と秋のスペイン語教授法研究会に加え、来年度の新カリキュラム実施に向けて、イベロアメリカ研究センター後援・スペイン語学科主催で教授法に関する2つのワークショップが開催された。

教授法研究会は3年目を迎え、学生のスペイン語力を具体的にどのように向上させるかという観点から実施した。

第5回研究会は、音声教育をテーマとして取り上げ、南山大学の泉水浩隆准教授に「スペイン語は日本語話者にとって発音のやさしい言語か？ —音声教育におけるヒント—」というテーマで発表していただいた。スペイン語は日本語と母音の数が同じで、発音の易しい言語とされ、音声教育は重視されているとは言えない。しかし、コミュニケーション上の誤解を生じないようにするためには、談話レベルの音声教育が不可欠であることが指摘された。さらに、実験音声学の研究方法の具体的な紹介があり、日本人スペイン語学習者は文の種類の判断を主に文末の動きに頼っていることが示された。本学の学部生の参加も多く、「イントネーションの大切さが分かった」という意見が多く寄せられた。

第6回は、作文教育をテーマに、独自のライティング教育で知られる拓殖大学の小池和良教授をお迎えし、「日本語話者がスペイン語で書くために 一構文演習とコロケーション」と題する講演会を開催した。書くためには、「聞く」「読む」というインプットが重要であり、それらを「理解する」ことを通して初めて「書く」というアウトプットが可能になることが指摘された。また、授業実践例として、新聞記事などを利用したコロケーション修得のための構文演習の具体例が示された。本学および他大学のスペイン語教員や教職を目指す学部生など多くの参加者があり、質疑応答も活発に行われた。

新カリキュラムに向けては、10月に来年度から使用する教科書の著者である東京外国語大学のコンチャ・モレノ教授による具体的な指導法に関するワークショップ、12月には評価法が専門のマドリード自治大学のテレサ・ボルドン教授によるテストと評価法に関するワークショップが開催された。いずれも授業に直結する充実した内容のワークショップであった。

来年度からは、ヨーロッパ言語共通参照枠に基づく教科書を使用した本学独自の新カリキュラムがスタートする。試行錯誤しながらの出発になるが、これまでの研究会で学んだことを生かし、少しずつ前進していきたいと思う。



## 公開講座・文化イベント

### 関西外国語大学公開講座

#### スペイン語映画を通してみるラテンな生き方

比嘉 セツ

2013年6月4日、イベロアメリカ研究センター主催の公開講座で、卒業から四半世紀余りを経て、母校の門をくぐることができた。参加して下さった方々の質問に答えながら、自らの学生時代を思い出し、なぜ、自分がラテンアメリカ映画の配給を始めたのが、より明確になった気がした。

エネルギーはあっても、本当に何がしたいのか分からなかった学生時代。スペイン語に魅了され、4回生の時に奨学金を得て留学したメキシコは、私に別の視点と活力を与えてくれた。日本では、ラテン的というと「貧しくても楽しそう」「くよくよしない」などのイメージがあるのだが、それはもしかすると、根本的な生き方から表面に出て来た「現象」なのかもしれない。当時は、まだ漠然として



比嘉セツ氏

いたが、メキシコから帰国後、周りの声に惑わされず、生きることがラクになった。就職試験にすべて落ちて、きっと次の道が開けるはず、という「根拠なき自信」が芽生えていたから。

この変化がどこから来たのかを探るために、今を映し出す映画をもっと観たい、と思ったとき、ラテンアメリカ映画が日本で余りにも上映されていない、という現状に初めて気づいた。

82年にコロンビアの作家、ガルシア＝マルケスが「百年の孤独」でノーベル文学賞を受賞し、ちょっとしたラテンアメリカ文学ブームになったこともあってか、その後、ラテンアメリカ映画祭などが、少しずつ行われるようになってきた。しかし、欧米作品のように1本で劇場公開されていたスペイン語映画といえば、ビクトル・エリセやカルロス・サウラといったスペイン人監督の作品で、今では必ず公開される、ペドロ・アルモドバル監督の「神経衰弱ぎりぎりの女たち」は1987年、今でいうミニシアターでの上映だった。

ラテンアメリカといえば、自主上映の形式で上映されていたボリビアのホルヘ・サンヒネス監督の「第一の敵」を初めとするウカマウ集団の作品群や、アカデミー賞外国語映画賞を受賞したアルゼンチン映画「オフィシャル・ストーリー」（87年公開）、ゴールデン・グローブ賞外国映画賞ノミネートのメキシコ映画「赤い薔薇ソースの伝説」（93年公開）、アカデミー賞外国語映画賞ノミネートのキューバ映画「苺とチョコレート」（94年公開）、カンヌ映画祭コンペティションに出品されたアルゼンチン映画「ラテンアメリカ／光と影の詩」（95年公開）が記憶に残っているところだろう。

どれも制作されてから数年後に公開されるのが普通で、メキシコのアレハンドロ・ゴンサレス・イニャリトゥ監督の1999年のデビュー作「アモーレス・ペロス」も、日本での公開は2002年だった。

2003年12月に、初めてキューバの首都、ハバナで行われる新ラテンアメリカ映画祭に参加すると決めたときも、日本の映画業界の人々から「そんな所に（失礼な！）行っても、良い映画なんて見つからない。カンヌとかベルリンに行くべき」と言われ、日本での配給権を買ったキューバ映画「永遠のハバナ」を公開する時も、「キューバ人の映画監督がいるの？」という反応だった。

日本の洋画業界の中では、大きな映画祭で受賞するか、米国で公開される作品以外、ラテンアメリカ映画は存在していなかった…。

毎年、ハバナやメキシコのグアダラハラ国際映画祭、2009年からブエノスアイレスで始まったVentana Surというフィルム・マーケットに参加し、様々な作品を観ながら気づいたことは、ラテンアメリカ映画はジャンルを問わず、どこかに一所懸命、生きようとしているのに、うまく行かない人々の姿が描かれていることに気づいた。監督たちは、よく“Una historia que se debe contar.”と言う。「語られるべき物語」（＝ひとつの歴史）を映画で表現するのだ、と。

資金を工面するプロデューサーが主導のハリウッド映画とは違い、ラテンアメリカ映画は、今も監督が全権限を持ち、各国の映画協会と助成金が、それを支えている。現在、ラテンアメリカで最も映画の制作本数が多いアルゼンチンとメキシコを例にとると良く分かる。アルゼンチン映画芸術協会（INCAA）は、年間約 150 本の企画の中から 70 本余りに制作費の半分を助成し、カンヌのフィルム・マーケットと組んで、ヨーロッパとの共同制作や欧米での配給を推進している。メキシコはテレビや通信関連企業がおさめる法人税の 1 割を映画に投資する映画法が制定され、国立のシネテカ（フィルムセンター）では、一般公開が難しいアート系作品を随時上映し、メキシコ映画協会（IMCINE）は脚本から制作までを資金だけではなく情報面でも支援している。

そんな中で若手映像作家たちが次々生まれ、今ではハリウッドにリメイク権を売るほどになってきた。昨今では欧州との共同制作も多い。2013 年のアカデミー賞外国語映画賞にノミネートされた「No」（日本公開未定）は、チリの若手、パブロ・ラライン監督作品だが、主演はメキシコのガエル・ガルシア・ベルナル、製作にはフランスも入っている。チリの独裁政権下で反ピノチェト運動の広報を任された広告代理店の男が主人公だが、1987 年に公開されたミゲル・リティン監督のドキュメンタリー「戒厳令下チリ潜入記」を思い出した。軍事政権そのものより、そこで生活する人々の姿勢や行動を描いていたからだ。

政治的な抑圧だけではなく、ラテンアメリカ映画には、貧困や病に打ちひしがれる人々、日本なら、さしずめ「弱者」と呼ばれる人々の姿を描いたものが多い。そこに見えてくるのは、「覚悟としぶとさ」だ。明日何が起ころうと、今を生きるという覚悟。内側の深いところにある静かな覚悟だ。

何百本もの映画を観て、その覚悟は監督を初めとする映画人たちの生き様でもあることが分かった。企画から何年もかけて、資金を集めながら粛々と映画を撮る。お金や名声は結果であって目的ではない。なぜなら、彼らにとって、映画を撮ろうとすることが生きることだから。10 年に 1 本の監督も 1 本撮って、その後、撮れない監督もいるけれど、いつか復活する。23 年ぶりに新作を撮ったチリのアレハンドロ・ホドロフスキー監督（84 歳）のように。このしぶとさが、生きる原動力、ラテンな生き方だと思う。

私も今は NHK の衛星放送でスペイン国営放送の通訳を週一度したり、ピアソラの「ブエノスアイレスのマリア」の字幕と 8 月に発売される CD の対訳をしたりしながら、今年から来年にかけて、あと 4 本の配給作品が待っている。果たしてやり遂げられるのかどうか。ラテンアメリカの友人たちは言う。「大丈夫、きっとできる」と。何の根拠もないけれど....。



関西外国語大学公開講座  
スペインのロマネスク美術 —魅惑と幻惑のはじまり—

Resumen conferencia

*El Románico en España. Iniciación a un arte fascinante*

Juan Antonio Olañeta Molina

El románico es un estilo artístico que se dio en Europa en los siglos XI, XII y comienzos de XIII. El origen mismo de la palabra “románico”, que fue utilizada por primera vez en su versión en francés, *architecture romane*, por el arqueólogo Charles de Gerville en 1818, hace referencia a que sus formas tratan de recuperar elementos de la tradición romana. Es un estilo que, si bien presenta unos elementos comunes desde Portugal hasta Hungría y Polonia, y desde Sicilia hasta Noruega, incorpora unas variaciones locales y una diversidad propias de un estilo tan extendido tanto cronológica como geográficamente.



Juan Antonio Olañeta 氏

El monje de la abadía de Cluny Rodolfus Glaber (c. 980 - 1047) describía los años posteriores al año 1000 de la siguiente forma: “Parecía que la propia tierra, como sacudiéndose y liberándose de la vejez, se revistiera toda entera de un blanco manto de iglesias. En aquel tiempo los fieles sustituyeron con edificios mejores casi todas las iglesias de las sedes episcopales, todos los monasterios dedicados a los diversos santos y también los más pequeños oratorios de campo”. Este comentario, repetido innumerables veces por parte de los especialistas, es una clara muestra de cómo, transcurridos los temores apocalípticos que caracterizaron los últimos años del siglo X, se dio un resurgir manifestado en múltiples aspectos, entre ellos el de la construcción de nuevos templos por doquier. Cabe situar el origen del Románico en una época que se inicia a comienzos del siglo XI y que está caracterizada por una mejora de la situación económica consecuencia de ciertos factores fuertemente interrelacionados entre ellos: la introducción de ciertas innovaciones en los medios de producción agrícola, el inicio del fenómeno de urbanización, un fuerte crecimiento demográfico y el incremento de los intercambios comerciales. Además de estos aspectos de índole económica, la

sociedad del momento en el que surge el Románico se caracteriza por un fortalecimiento del poder de los nobles, los cuales ostentan el poder militar, lo que les permite controlar los medios productivos y a la población. Es la sociedad del denominado feudalismo.

Es también esta una sociedad de marcado carácter teocrático, en el que la Iglesia va asumiendo cada vez un rol más preponderante. Se inicia una época que verá el apogeo de las órdenes religiosas, especialmente la benedictina, en el que la Iglesia ostenta el monopolio del saber y controla los recursos productivos que no están en manos de los nobles. Es también esta una época en la que las peregrinaciones llevan a los hombres a desplazarse a grandes distancias, principalmente a Jerusalén, Roma y Santiago de Compostela. Otro importante fenómeno marcó el periodo de 250 años en el que se desarrolló el Románico, sobre todo el siglo XII y comienzos del XIII. La lucha entre religiones, entre el cristianismo y el Islam, dio origen a las denominadas Cruzadas, que llevaron a muchos hombres de los reinos cristianos de Occidente a ir a Tierra Santa para luchar por el control de los Sagrados Lugares.

Pero no solamente los conflictos se producen entre religiones diferentes. Dentro de la propia religión cristiana se dan situaciones convulsas y de fuerte enfrentamiento. La corrupción existente en el seno de la propia Iglesia, manifestada en fenómenos como el de la simonía (venta de cargos eclesiásticos), la relajación de la moral de los clérigos, etc., provoca la reacción del Papado, desde el cual se promueve lo que se ha denominado como la Reforma Gregoriana, consistente en una profunda renovación espiritual de la Iglesia.

En la Península Ibérica, reyes y nobles tenían prohibido por el Papa acudir a las cruzadas en Tierra Santa, pues ellos tenían su propia cruzada en casa. La quizás mal denominada “Reconquista” es un periodo de ocho siglos en el que los reinos cristianos del norte de la Península van conquistando paulatinamente terreno a sus vecinos musulmanes del sur. Es en los siglos XI, XII y XIII cuando este acontecimiento adquiere su mayor apogeo. La geografía del Románico está claramente configurada por la Reconquista y el ritmo como la frontera entre el mundo cristiano y el musulmán se va desplazando hacia el sur.

Es el románico un arte total, que está presente en buena parte de las facetas de la vida

de su época, sobre todo de la de sus élites, y que se manifiesta en las más variadas disciplinas artísticas: arquitectura, escultura y pintura en diferentes materiales y soportes, orfebrería, tejidos, forja, numismática, etc.

El teólogo y filósofo Bernardo de Chartres dijo en el siglo XII “Somos como enanos a los hombros de gigantes”. Hacía referencia con ello a lo mucho que el mundo de su época debía al mundo clásico. El románico toma del arte clásico sus estructuras arquitectónicas, como el arco de medio punto, o la bóveda de cañón. Muchos de los edificios románicos, sobre todo aquellos que tienen cierta importancia, presentan la denominada planta basilical, que tiene su origen en las basílicas romanas. El espacio semicircular donde se ubicaba el juez, pasa a ser en los templos cristianos la zona más sagrada, donde se ubica el altar y se oficia la misa. En algunos casos, como en la portada del monasterio de Ripoll, se reproducen, por motivos de prestigio, las formas de los arcos de triunfo romanos. También en la escultura se recurre en ocasiones a buscar modelos formales en los restos de escultura clásica conocidos. Un caso realmente interesante, y que se haya en el centro de la controvertida datación de parte de la decoración esculpida del último tercio del siglo XI en los reinos hispánicos, es el del sarcófago de Husillos, en el cual parecen estar inspirado algún capitel de la ya citada iglesia de San Martín de Frómista (Castilla) y parte de la escultura de la catedral de Jaca (Aragón).

La sociedad en la que se desarrolló el románico era un mundo marcadamente religioso. Aunque ya se venían desarrollando desde hacía siglos, esta es la época de máximo esplendor de los monasterios, y los reinos hispánicos no fueron una excepción. La abadía benedictina de Cluny se había convertido durante el siglo XI en uno de los principales centros religiosos del Occidente europeo. Cientos de establecimientos monásticos dependían directa o indirectamente de la gran abadía borgoñona. Los mismos seguían la regla de San Benito, la cual marcaba al detalle las actividades y los horarios del día, los cuales se distribuían de acuerdo el denominado *ora et labora*, es decir, los monjes repartían su tiempo entre la oración y el trabajo. Esta laboriosidad y disciplina, así como las muchas donaciones que recibían de los fieles, hicieron de estos centros un elemento fundamental de la estructura económica medieval. En ocasiones los reyes y nobles se servían de comunidades monásticas para desarrollar la economía de una zona. Los edificios de los monasterios seguían un esquema que hoy denominaríamos estándar. Su planta se adaptaba a las necesidades, a las actividades y

a la vida cotidiana de los monjes. El claustro era el espacio central del monasterio y a su alrededor se desarrollaba la vida monástica. Es por ello que en torno al él se disponen las diferentes estancias del monasterio: el refectorio, la sala capitular, el dormitorio, la cocina, etc. Un espacio especialmente relevante para la preservación de la cultura clásica fue el denominado *scriptorium*. En el mismo, algunos monjes se dedicaban a elaborar los manuscritos, a copiar códices y a iluminarlos con bellas miniaturas. Gracias a esta actividad han llegado hasta nosotros buena parte del saber clásico, que de otra forma se hubiera perdido. Las cuatro galerías del claustro estaban formadas por arquerías apoyadas en capiteles que en muchas ocasiones estaban decorados con escultura, muchas veces figurativa, que representaba escenas bíblicas, animales fantásticos vidas de santos, y también de la vida cotidiana. Algunos claustros eran auténticas biblias en piedra.

Otros edificios religiosos muy importantes eran las catedrales, que estaban en aquellas localidades donde había un obispo. Mientras que el monasterio se dedicaba en su aislamiento del mundo a orar por la salvación de la Humanidad, la catedral estaba abierta a los fieles. Mientras que el monasterio estaba sobre todo vinculado al mundo rural, la catedral está asociada a lo urbano. Un modelo de catedral que se dio en Francia y en España es el que se ha denominado templo de peregrinación. En la catedral de Santiago de Compostela (Galicia) las naves laterales se prolongan por detrás del altar para formar un pasaje denominado girola, que está pensado para que los peregrinos pudieran venerar las reliquias de del el apóstol Santiago. Tales suelen ser las dimensiones de las catedrales, que se tardaba siglos en finalizar, incluso algunas quedaban inconclusas. Una catedral era una auténtica máquina de culto, y estaba diseñada para ello. Además su grandeza era un elemento de prestigio, tanto para la ciudad, como para su obispo. En España destacan las catedrales de Jaca y Roda de Isábena (Aragón), Gerona (Cataluña), Catedral Vieja de Salamanca y la de Zamora (León).

Pero en el románico no todo eran edificios religiosos de grandes dimensiones. Son mayoría las pequeñas iglesias rurales. Muchas de ellas están hoy en día aisladas en lugares espectaculares. Es esta una de las cosas que hace que románico sea tan atractivo para el hombre de hoy en día, tan urbanizado, su integración en el paisaje que le rodea.

Aunque la mayor parte de los testimonios románicos que nos han llegado hasta nuestros días son de carácter religioso, por fortuna también se han conservado edificios de carácter civil, como los castillos, de los que uno de los más destacados es el castillo de Loarre (Aragón). En una tierra con constantes conflictos, contra el Islam, o entre facciones rivales las fortalezas jugaban un papel muy importante. El castillo de Loarre fue durante no muchos años una de las fortalezas avanzadas en tierra de frontera. Por la misma razón, las ciudades y villas se rodeaban de potentes murallas que les permitieran resistir prolongados asedios. Las murallas románicas más completas y conocidas en España son las de Ávila, en Castilla. Otro elemento defensivo de importancia estratégica eran las torres, las cuales se ubicaban en puntos elevados de tal forma que pudieran dominar un amplio panorama, a la vez que se intentaba que entre las diferentes torres tuviera contacto visual. Los palacios, ya sea de reyes, nobles u obispos, eran unos de los edificios más importantes de la ciudad. El prestigio del personaje que los habitaba quedaba plasmado en la monumentalidad de la construcción. Y no hemos de olvidar obras de ingeniería, como fuentes, puentes, hórreos (almacenes de grano), etc.

En algunas zonas de Europa se dan estructuras que son específicas de un área geográfica concreta. En ello el románico hispano no es una excepción. Así podemos ver como en Castilla abundan las iglesias con una galería porticada en al menos uno de sus flancos. Estos espacios responden a la forma como se realizó la repoblación de los territorios que se fueron conquistando a los musulmanes. Dado que para repoblar las peligrosas tierras de frontera había que establecer incentivos atractivos, las poblaciones así repobladas contaron con una legislación mucho más libre que el resto. Tal era su grado de autonomía que los ciudadanos se reunían en estas galerías porticadas de las iglesias para la gestión del municipio. Esta inédita participación del pueblo en el gobierno de la ciudad llevó a algún autor a denominar a estas galerías como “espacios de libertad”.

En ocasiones la diversidad que caracteriza al románico viene determinada por la facilidad o dificultad de acceso a ciertos materiales. En aquellas zonas donde no hay canteras de piedra se recurre al ladrillo. Es lo que se ha denominado de forma incorrecta “Románico mudejar”. La utilización del ladrillo en lugar de la piedra impone una forma diferente de articular los muros y su ornamentación.

Buena parte de la decoración figurada de las obras románicas son las propias de una sociedad teocrática, en la que la religión lo envuelve todo. Junto a las escenas del Antiguo y el Nuevo Testamento, aparecen impactantes imágenes del Apocalipsis y el Juicio Final, escenas de la vida y martirio de los santos, episodios de textos no reconocidos por la Iglesia oficial –los llamados apócrifos– e imágenes asociadas a la jerarquía eclesiástica. Además, no es extraño contemplar la representación de los comitentes, como ya hemos comentado, temas de carácter laico, como luchas de guerreros, leyendas, fábulas, imágenes del bestiario –al que se le dota de una simbología muy ligada a lo religioso–, escenas de la vida cotidiana o, incluso, escenas de un marcado carácter erótico.\_

Los ábsides, la parte más sagrada del templo, donde se oficia la misa, se llenan de imágenes que muestran en su disposición el orden cósmico que el ser humano de la época concebía. La divinidad se alojaba en lo más alto, en la bóveda de cuarto de esfera del ábside, mientras que conforme se descendía disminuía el nivel de santidad. Estas imágenes podrías estar pintadas o esculpidas, pero siempre en color. Otro espacio particularmente relevante son las portadas. La puerta de la iglesia es la alegoría de la puerta del cielo, es el tránsito entre lo pagano y lo sagrado. En consecuencia, este privilegiado elemento se llena de imágenes, e las que, como en el ábside, se refleja el orden cósmico y se reserva a la divinidad la parte semicircular, el tímpano. Pero la imagen también se sitúa en otros lugares fuera de las portadas y cabeceras de las iglesias. Está presente en los capiteles de los claustros y en el interior de los templos, coronando columnas y pilares. Pero también la imagen se convierte en objeto en sí misma. Imágenes devocionales de la Virgen con el Niño, o de Cristo crucificado ocupan capillas y altares. Son imágenes que participan en el rito y que despiertan la devoción del fiel. Su función es diferente a la desempeñada por las imágenes pintadas o en la escultura monumental. En ocasiones estas imágenes exentas forman grupos, los cuales se utilizan, además en dramas litúrgicos en los que se escenifican pasajes de la Biblia, como la Pasión de Cristo. Tal sucede con el ya tardío, de 1251, Descendimiento de Sant Joan de les Abadesses (Cataluña). En ocasiones las figuras de estos grupos escultóricos tienen brazos y piernas articulados para que puedan desempeñar diferentes funciones en las escenas de un drama. Pero, también son imágenes de culto, como lo demuestra que en este mismo conjunto la imagen de Cristo presente en su frente un relicario, en el que se guardaba una hostia consagrada. De esta forma, la talla adquiriría un auténtico valor sagrado.

Especial relevancia en la liturgia y en el ornamento de los templos lo tenían los retablos y frontales de altar, los cuales estaban realizados con ricos materiales y decorados con esmaltes y piedras preciosas. No nos han llegado muchos ejemplos, pero algunos de los conservados son realmente espectaculares, como el retablo de San Miguel de Aralar (Navarra), o el del Monasterio de Santo Domingo de Silos.

Cuando no se disponía de recursos para encargar un retablo de orfebrería, se recurría a las tablas pintadas, que eran más asequibles. En Cataluña se ha conservado el mayor conjunto de pintura sobre tabla románica de Europa, un tercio del cual se conserva en el Museo Nacional de Arte de Cataluña en Barcelona. Estos frontales tienen ricos colores, en ocasiones presentan partes recubiertas de finas placas de metal y su ornamentación simula las piedras preciosas. Las arquetas ricamente decoradas con marfiles, metales, esmaltes y piedras preciosas eran un objeto muy apreciado, y que solía ser habitual regalo entre las élites sociales. Se utilizaban para guardar objetos de valor y reliquias, y estaban finamente decoradas con escenas bíblicas o de la vida del santo cuyos restos albergaban. Otro de los lugares donde abundaban las imágenes es en los libros. Como ya hemos comentado, en los monasterios se copiaban textos religiosos y obras literarias. Al texto se le añadían hermosas y coloristas miniaturas. En el románico español destacan los denominados “beatos”, que son unos códices cuyo texto son unos comentarios al Apocalipsis que un monje llamado Beato, de cuyo nombre hay el nombre de estos libros, realizó en el norte de España. Las miniaturas con representaciones del Apocalipsis de estos beatos han fascinado a especialistas y aficionados. Los más antiguos datan del siglo X.

Uno de los edificios más completos del románico español es la colegiata de San Isidoro de León, ya que en el mismo está presente la arquitectura, la escultura, la pintura, la orfebrería, los textiles, la miniatura, etc. Sin duda este edificio reúne muchos de los elementos que hacen del románico español un arte fascinante.



タンバン（教会の入口扉上のアーチにはめ込む半円状の飾り） Juan Antonio Olañeta 氏贈

## 講演会「スペインのロマネスク美術 —魅惑と幻惑のはじまり—」の通訳をして

田尻 陽一

カタルーニャピレネー山中にあるロマネスク様式の教会は限なく廻った。山岳ドライブが快適だった。カタルーニャの平地では、タラサ、カルドナ、ソルソナ、ジロナなどにあるロマネスク教会も見てまわった。バルセロナ市内にもロマネスク教会は3つある。アラゴンはハカからサン・フアン・デ・ラ・ペニャまで北上した。カスティーリャではセゴビアやレオンなど、ロマネスク教会があると、必ず訪ねた。

どうしてロマネスク様式が気になるのだろうか。直感的な美意識なのだが、ゴシック様式のように醜悪でもなく、ルネサンス様式のように権威主義的でもなく、バロック様式のように威圧的でもない。山懐に抱かれた石造りの小さな教会に出会うと、素朴といってもいいだろうか、日本の民芸品に通じる美しさにほっとする。また、手作りの良さといってもいいだろうか、回廊の柱頭に彫られた稚拙な彫刻に人間の営みを肌で感じてしまう。カタルーニャ美術館に集められたロマネスク壁画の前に立つと、旧約聖書、新約聖書、聖人譚を構図化する彼らの空想力、想像力に驚かされる。我々が忘れ去ってしまった幻想力に惹かれる。

しかし、今回、フアン・アントニオ・オラニェタ氏の『スペインのロマネスク美術』の講演を通訳することで、違った視点からロマネスク美術を見直すことができた。副題として「魅惑と幻惑のはじまり」と美学的な視点で田尻が勝手につけたのだが、オラニェタ氏はロマネスクを中世における政治、経済、宗教という多面的な側面から話しをしてくださった。

中世も10世紀になると、人々は終末論の影響から新しく救いを求めたこと。そこに新しい芸術様式を求める機運があったこと。グレゴリウス7世(1073~85)の改革で、教会内部の腐敗を一掃すると同時に、世俗権力と教会権力を分離したこと。ベネディクト会クリュニー派が祈りと労働を修道僧の生活規範とすることで、修道院が経済活動の中心地のひとつになったこと。また、十字軍の遠征により人の移動がはじまり、巡礼という個人的な移動だけでなく、教会を建築する石工集団も注文を請け負うことで移動していったこと。オラニェタ氏の講演は大掴みにいえば、上記に挙げた点であろうか。

イベリア半島におけるクリュニー派の布教活動から教会建築様式をみていくと、ロマネスク様式の教会がイベリア半島北部の山中から次第に南下していくことが分かる。また、石工集団が国境を越え(国境という概念がいまとは違っていたであろう)移動したから、北イタリアのロンバルディア様式がカタルーニャにまでもたらされたことも分かる。

講演会のあと、「今日見せてもらったスライドで、ボクの見えていない教会がまだまだあることが分かった。特にフランス側ピレネーには行ったことがない」というと、「今度バルセロナに来たら、一緒にフランス側に行こう」と誘ってくれた。楽しみが一つ増えた。



末尾になるが、この講演会を東京で企画し、関西でもやらないかと言ってきてくださったスペイン・ロマネスク・アカデミー（日本）の会長勝峰昭氏が体調を崩され、来学できなかったことは誠に残念なことであった。今回の素晴らしい講演会を本学で開催できたことに心から感謝申し上げたい。暖かくなれば上京し、ワイン片手にロマネスク談議に花を咲かせたいと思っている。



スペイン語学科主催 教授法ワークショップ  
(イベロアメリカ研究センター後援)

第1回

**El enfoque comunicativo moderado y su utilidad para la clase**  
**Un ejemplo: *Nuevo Avance*.**

Concha Moreno García

**Introducción**

La importancia de elegir un manual para implantarlo como guía de un curso es innegable. Ese manual va a ayudar al profesorado a organizar contenidos y actividades; permitirá llevar un ritmo similar a quienes comparten el mismo nivel; definirá un enfoque y aliviará la preparación constante de clases, ya que aportará contenidos teóricos adaptados al nivel, ejercicios secuenciados y actividades graduadas, además de tener en cuenta las cuatro destrezas y la cultura. Otro factor que debería tenerse en cuenta es el contexto educativo en el que ese manual va a ser usado. No debería chocar frontalmente con la tradición educativa del centro, pero tampoco debería renunciar a introducir elementos que formen al alumnado para un mundo que vaya más allá de sus fronteras personales, educativas, incluso nacionales.



Concha Moreno García 氏

**El enfoque comunicativo moderado**

Si pretendemos mantener las bondades aceptadas del sistema japonés tradicional de enseñanza de lenguas, que da mucha importancia a la gramática, y al mismo tiempo

introducir el enfoque comunicativo, nuestra opción debería ser el enfoque comunicativo moderado. He aquí sus características.

- Focaliza la comunicación sin renunciar a la gramática
- El *input* se caracteriza por
  - Usar muestras de lengua elaboradas didácticamente en un primer momento
  - Convertirse en muestras de lengua reales
  - Estar contextualizado en ambos casos
- Se apoya en los conocimientos previos del alumnado
- Se centra en temas relacionados con la realidad del estudiante
- Presenta los contenidos poco a poco y progresivamente
  - Trabaja desde las actividades pre-comunicativas para llegar a las comunicativas (Littlewood).
  - Insiste en la realización de preguntas y respuestas adecuadas al contexto
  - Da modelos para exigir producción
  - Genera interacción apoyándose en la seguridad de las estructuras

Un manual que responde a estas características es *Nuevo Avance*.

### **Principios pedagógicos de *Nuevo Avance***

- La selección temática, que se convierte en el hilo conductor de los demás elementos: gramaticales, léxicos y funcionales.
- La inclusión de elementos culturales orientados desde una perspectiva intercultural.
- La atención a los distintos estilos de aprendizaje, nacida de la diversidad que las autoras siempre hemos tenido en nuestras aulas.
- La progresión de contenidos hace de este nivel un verdadero nivel inicial, no como la mayoría, que, en realidad, se dirige a falsos principiantes.
- La selección de actividades precomunicativas, que dan seguridad a los principiantes y facilitan la fijación de estructuras, y comunicativas, que invitan

a la producción de *output*, pero sin dejar al alumnado solo; podrá apoyarse en los modelos y en las actividades orientadas a la precisión.

- Las destrezas están integradas con el resto de los contenidos gramaticales y léxicos así como con el tema de la unidad. Destacamos especialmente:
  - o En la sección dedicada a la escritura el trabajo previo, con propuestas de modelos, ayudan enormemente a la realización de la tarea escrita del estudiante. Esto, afortunadamente, lo constatamos, día tras día, en el aula.
  - o En lo referente a la comprensión auditiva se avanza paulatinamente, desde las tareas más sencillas de reconocimiento, como saber si lo que están oyendo es una presentación formal o informal, hasta audiciones más elaboradas, donde se pide al estudiante que comprenda el mensaje y reaccionen ante él. Primero parcialmente y luego de forma global. Por ejemplo, escuchar y responder a una serie de preguntas sobre una encuesta hecha en la calle a varios españoles para saber si cuidan de su salud.

Por lo que se refiere a las secciones

- El “**Pretexto**” presenta los contenidos con un *input* comprensible y dando modelos de lengua. Por otro lado, se llama la atención sobre los puntos gramaticales y léxicos que se desarrollan y amplían más tarde. No obstante, si usted lo desea, puede dejar el Pretexto para trabajarlo como una actividad más dentro de la sección “De todo un poco”.
- El manual presenta conjuntamente los contenidos gramaticales, léxicos en dos apartados que reciben los siguientes nombres "**Contenidos**" y "**Practicamos los contenidos**". La decisión de hacerlo así procede de la dificultad, propia del nivel inicial, en el que es prácticamente imposible presentar la gramática sin un vocabulario y viceversa; de ahí que aparezcan juntos como acabamos de señalar.
- La selección de **funciones comunicativas** se ha hecho de acuerdo con lo tratado en la unidad y están orientadas a las recomendaciones del MCER, que defiende que en este nivel el alumnado sea capaz de pedir permiso, pedir favores,

preguntar y dar direcciones, presentarse, hablar y preguntar sobre hábitos, costumbres y gustos, por nombrar los más importantes.

- En el apartado "**De todo un poco**" se trabaja con todo lo aprendido anteriormente de una forma más activa, dentro de lo que este nivel permite, que es poco.
- **Repaso.** Cada tres unidades presentamos una serie de actividades que vienen a reforzar lo estudiado previamente y que pueden servir de exámenes.
- **Examen tipo DELE.** Hemos querido incluir un examen que siga el modelo y las pautas dictadas por el Instituto Cervantes para este nivel y que se administra dos veces al año desde mayo de 2009.
- La **transcripción** de las audiciones permitirá al alumnado reforzar su capacidad comprensiva si se le anima a leerlas al tiempo que vuelven a escuchar.

### **Ejemplos prácticos**

A lo largo del taller que tuvo lugar en la Universidad Kansai, pude presentar ejemplos de cómo sacarle más partido a los materiales que incluye este manual. Con ellos el profesorado asistente pudo ver que un simple ejercicio gramatical, puede convertirse en una reflexión pragmática o dar pie a una sencilla conversación dirigida, ayudando al alumnado desde el nivel inicial a desarrollar la intuición y la creatividad.

Asimismo pude presentar trabajos realizados por los estudiantes que apoyan las afirmaciones realizadas anteriormente.

### **要約**

#### **文法を重視するコミュニカティブ・アプローチと授業への有用性 —*Nuevo Avance*を例にして—**

コンチャ・モレノ・ガルシア

文法を重視する日本の伝統的な言語教育システムを維持し、コミュニカティブ・アプローチを導入しようとするなら、「穏健なコミュニカティブ・アプローチ (enfoque comunicativo moderado)」を採るべきであろう。このアプローチでは、文法を重視しつつ、初習の段階からコンテキストの中で実際のコミュニケーションに近づくよう段階的なイン

プットを行うことが特徴である。本ワークショップでは、このアプローチに合致する教材の1つである *Nuevo Avance* を例にして、その構成と指導原則を挙げ、授業における具体的な指導法を示した。(和佐敦子要約)

## 第2回

### La evaluación de EL/2 en el marco de la instrucción formal

Teresa Bordón

teresa.bordon@uam.es

La sesión sobre evaluación de EL/2, celebrada el 14 de diciembre de 2013, en la Universidad de Kansai Gaidai se enfocó en algunas de las cuestiones básicas que se deben tener en cuenta al plantearse evaluar a aprendices de EL/2, en contextos de instrucción formal. Por lo tanto, los objetivos de la presentación consistieron en: 1) aclarar conceptos; 2) justificar la necesidad y utilidad de los exámenes, así como garantizar su calidad; 3) presentar ejemplos de tipos de examen y de pruebas; 4) establecer el procedimiento para diseñar pruebas y exámenes de aprovechamiento.



Teresa Bordón 氏

Es relevante aclarar el alcance de conceptos como evaluar y examinar ya que a menudo se utilizan como intercambiables, y el examen es un tipo de evaluación, pero no toda evaluación se realiza por medio de exámenes.

En segundo lugar, se planteó la necesidad de los exámenes puesto que el sistema los requiere – y no sólo en el contexto académico – constituyendo la evaluación, además, una de las especificaciones del currículo-. Igualmente, en un plano más concreto, dentro de la enseñanza-aprendizaje en el aula, los exámenes sirven para clarificar los contenidos y objetivos para profesores y estudiantes, suponen una herramienta de motivación para aprender, y de una manera un poco más perversa se pueden convertir en un instrumento de presión para los estudiantes.

También se defendió la utilidad de los exámenes. Por un lado, constituyen un instrumento de medición que permite averiguar información que de otra manera resultaría costosa y lenta de obtener. Paralelamente, los exámenes cumplen una función pedagógica, ya que a partir del análisis de sus resultados, pueden ejercer

un efecto de rebote (*washback*) que permite reflexionar sobre la calidad y utilidad del propio examen, la progresión del aprendiz, la secuencia didáctica, el programa, o la metodología adoptada. Sin olvidar que los exámenes son indispensables para la investigación en áreas de la lingüística aplicada como el análisis de errores.

No obstante, para que los exámenes realicen su función con éxito es necesario que cumplan los requisitos básicos de validez, fiabilidad y viabilidad. Por lo tanto, estos deberán estar correctamente diseñados, bien administrados y proporcionar datos relevantes que permitan tomar decisiones correctas y adecuadas.

El punto central de la presentación lo constituyó los tipos de exámenes y los tipos de pruebas adoptados para extraer información de la competencia comunicativa del aprendiz de EL/2, valiéndose de tareas de examen que requieren las diferentes actividades de la lengua: comprensión, expresión e interacción en las modalidades oral y escrita.

Así, se clasificaron los exámenes de acuerdo con su objetivo, en: a) exámenes de aprovechamiento, cuya finalidad consiste en obtener información sobre los logros del aprendiz, desde un punto de partida a otro de llegada; y b) exámenes de nivel de dominio, cuya meta es obtener información que permita predecir lo que la persona puede hacer en situaciones de uso “real” de la lengua, sin interesarle en cómo ha llegado hasta ahí. La tabla siguiente contiene un resumen de los tipos de examen de acuerdo con su objetivo.

TIPOS DE EXÁMENES	APROVECHAMIENTO	prueba de clase
		final de unidad
		mitad de semestre
		final
		etc.
	NIVEL DE DOMINIO	examen de entrada
		clasificación
		examen de salida
		acreditación: diploma (DELE)

Respecto de los tipos de pruebas, se pueden clasificar de acuerdo con las

competencias - lingüística, pragmática - que busquen evaluar, o bien la destreza o combinación de destrezas seleccionada para la obtención de respuestas del candidato, o el formato que se adopte. En cualquier caso, la selección de las pruebas que se incluirán en un examen se realizará de acuerdo con el tipo de examen, el nivel del aprendiz y el tipo de enseñanza adoptada en el aula. Una tarea de examen no diferirá del tipo de actividad o ejercicios utilizados en el aula para la enseñanza- aprendizaje. Lo que las diferencia es el uso que se hace de una u otra. En un caso averiguar competencia del aprendiz a través de su actuación (examen), en el otro trabajar en el proceso de adquisición de la L2. En cualquier caso, el enfoque metodológico del examen y de las pruebas que lo conforman deberá ser coherente con la metodología adoptada en el aula, así como con los procedimientos didácticos utilizados para la instrucción.

Se presentaron ejemplos de una variedad de pruebas, lo cual propició la discusión acerca de las ventajas o inconvenientes de cada una de esas pruebas según se usen para un examen de aprovechamiento (averiguar qué ha aprendido el estudiante) o de nivel de dominio, como son los DELE (garantizar un nivel de competencia que permita anticipar actuación). En este sentido, los profesores que imparten docencia de EL/2 en Kansai Gaidai se enfrentan con un reto doble a la hora de planificar la enseñanza de la lengua y su evaluación. Por una parte tienen que evaluar (con exámenes y otros procedimientos) a sus alumnos para determinar su aprovechamiento y darles una calificación, y por otra, tienen que preparar a sus alumnos para que presenten a los exámenes para la obtención de un DELE.

En la interacción con los profesores asistentes, uno de los puntos de reflexión más interesante surgió al plantear las dificultades que presenta evaluar la expresión oral de los aprendices. Tanto en lo que supone el diseño de pruebas que proporcionen muestras de lengua evaluables, como las derivadas de la necesidad de que las personas que tengan que evaluar esas muestras puedan calificar de una manera lo más objetiva posible para garantizar la fiabilidad de la puntuación. De ahí la necesidad de ser cuidadoso en el diseño y administración de las pruebas, así como de definir criterios de evaluación específicos para cada examen que permitan asignar una nota de la manera más justa.

## REFERENCIAS

- Alderson, Charles J. (2000): *Assessing Reading*. Cambridge, C.U.P
- Bachman, L. y Palmer, S. (1996): *Language Testing in Practice*. Oxford. O.U.P.
- Bordón, T. (2006): *La evaluación de la lengua en el marco de E/L2: Bases y*

*procedimientos*. Madrid, Arco Libros.

Buck, C. (2001): *Assessing Listening*. Cambridge, C.U.P.

Cushing Weigle, S. (2002): *Assessing Writing*. Cambridge, C.U.P.

Luoma, S. (2004): *Assesing Speaking*. Cambridge, C.U.P.

Purpura, James A. (2004): *Assessing Grammar*. Cambridge, C.U.P.

Read, J. (2000): *Assessing Vocabulary*. Cambridge, C.U.P.

## 要約

### 学校教育の枠組みにおける第2言語としてのスペイン語(EL/2)の評価

テレサ・ボルドン

本ワークショップでは、第1に、評価の概念を明確にし、試験は評価の1つであり、評価が試験のみで行われるべきものではないということを指摘した。次に、試験の必要性和効用およびその質を保証する必要性を示した。

試験はその目的によって、到達度テスト(exámenes de aprovechamiento)と習熟度テスト(exámenes de nivel de dominio)に分けられる。本ワークショップでは、到達度テストと小テストの具体例を示し、小テストと到達度テストを作成する方法を示した。いずれのテストにおいても重要なことは、そのコースで採用した教授法と整合性がとれていることである。

参加者からは、学習者のスピーキング・スキルを評価することの難しさが問題点として提起された。正しく評価するためには、小テストのデザインと管理に注意を払い、明確な評価基準を設けるべきである。(和佐敦子要約)

#### 編集後記

慶長遣欧使節 400 周年記念であったからというわけでないが、2013 年度はスペイン関係のシンポジウムや講演会を開催することができた。一方、スペイン語教授法の講演会も第 6 回目に入るとともに、学科と共催のワークショップも実現することができた。この場を借りて関係諸氏に謝意を表するとともに、2014 年度の活動に対するご理解と協力をお願いしたい。

(イベロアメリカ研究センター長 林 美智代)

2014 年 3 月発行

発行 KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

イベロアメリカ研究センター

〒573-1001 大阪府枚方市中宮東之町 16-1

TEL.072-805-2801 (代表)

<http://www.kansai-gaidai.ac.jp>